など倭名抄に見え、建武年中行事にめの御汁ものといひ、又後拾遺集にめをつゝみてつかはしたりとみえたり、

〔藻鹽草八草〕藻

いつもの花河上のいつもの花といへり、たゞのもをも云也、をきつ藻、河藻、玉藻、玉もかりしくとよめり、或はもをかりくうと云説にあり、それも玉も刈食とかけるによりて、かりはむと云り、又はしくといへば、もをかりしくなど心得たり、しかれども、これいづれもわろし、玉もをかりしとたゞ云也、く文字はたすけことば也と云々、なびき藻、すが藻、しき藻かる藻、あまの也たく藻、生と云り、又はあまのたくもとも云、つくも、老たる母のすく藻、是はもすゝむまうしの食物也、すくもたくなどもよめり、かる藻これぬのしゝのかぐ物也、なつげ藻、莫告藻とかけり、しかれ共、くづみだれ藻、ながれ藻、玉藻かづく、ひじき藻、伊勢物語ひじきもの海藻の中にひすきものにはゆしつゝもとよめり、六味菜同世俗にはひじきもと云これら也、しかれば、ひじきもものには袖をしつゝもとそへたる也、しきものは、中にひじきもといふ物をやるとて、ひじきもと云べき樣なしと云々、河菜草異名也玉藻の花、をきの藻くづ、うぢ河に生る菅、方

〔本草和名九草〕昆布、乾苔性熱柔苔性冷昆布一名綸布、出兼名苑和名比呂女、一名衣比須女、

〔倭名類聚抄十七海菜〕昆布　本草云、昆布味鹹寒無毒、生東海、和名比呂米、一名衣比須女、陶隱居注云、黃黑色柔細可食、

〔箋注倭名類聚抄九藻〕按是物於諸海藻中最闊大、故云比呂米、產蝦夷地、故云衣比須女也、○中略證類本草引作柔韌、證類本草又引陳藏器云、生南海、葉如手、乾紫赤色、大似薄葦、陶云、出新羅、黃黑色葉柔細、陶解昆布、乃是馬尾藻也、按陳氏所見陶注作柔細、故云乃是馬尾藻、若作柔韌何以陶所言爲馬尾藻乎、源君所據、或與陳氏同、今不徑改、然其爲柔韌之誤、無容疑、宜從證類本改正、

〔下學集下草木〕昆布

〔尺素往來〕當日早晨之粥汁者、干蕨、大菽、同菜者炙和布、炙昆布、醬鰈、烏梅、幷唐納豆之內兩三種、○中略

茶子者、○中略結昆布、